



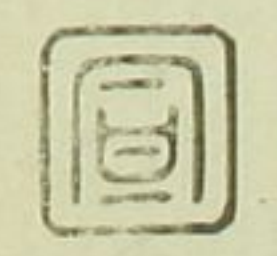
王父乙叟居士嘗好緋借所志朝暮皆是也  
 戊子晚秋以病卒年齒八十宜也長其側  
 受其教麗澤之厚熏陶之益何以可忘  
 矣 王父之為人謙讓無欲不及乎利  
 達不拘乎聲聞草稿滿筐不欲出  
 以示人然平生之草稿案頭為堆嗚呼雖  
 有其稿無其人則恐百年後忘其名損其  
 稿而虛平生之所為於是欲把遺稿以梓



之以傳于後世不窮且顯平生之所為也以  
狀謀家翁且告同好士抄錄若干稿以編  
一書名為代斲矣是行也家翁囑跋乎  
宣也嘗私欲書 王父之氣質故不違  
命不辭陋述所有以跋其尾云

文政十二年屠維赤奮若相月

愚孫渡邊宣謹撰



山水清暉之句入得清暉之句

山水清暉之句入得清暉之句  
山水清暉之句入得清暉之句  
山水清暉之句入得清暉之句  
山水清暉之句入得清暉之句  
山水清暉之句入得清暉之句  
山水清暉之句入得清暉之句  
山水清暉之句入得清暉之句  
山水清暉之句入得清暉之句  
山水清暉之句入得清暉之句  
山水清暉之句入得清暉之句

Let us now turn to the question of  
the — — — — — — — — — —  
the — — — — — — — — — —  
the — — — — — — — — — —  
the — — — — — — — — — —  
the — — — — — — — — — —  
the — — — — — — — — — —  
the — — — — — — — — — —  
the — — — — — — — — — —  
the — — — — — — — — — —  
the — — — — — — — — — —

Let us now turn to the question of  
the — — — — — — — — — —  
the — — — — — — — — — —  
the — — — — — — — — — —  
the — — — — — — — — — —  
the — — — — — — — — — —  
the — — — — — — — — — —  
the — — — — — — — — — —  
the — — — — — — — — — —  
the — — — — — — — — — —  
the — — — — — — — — — —





吹嶺



遺吟

方壺亭

乙叟居士

若水や亀を心脊戸の流あり  
 雪掃て踏よるや若菜畑  
 冬はつらぬい里さして梅見外  
 手紙つけ葉うらむ石あり梅む  
 俄可免柳をかぬるちやこころ  
 旅見よ水のたぐも、槌の音  
 拍をぬり書きし中よ柳外

うらひ才や土器ともう投以才  
 陽たや茄子苗畑の生る四角  
 うけらるや印の目切る志門の流  
 かたありと袖のひより春の風

福荷草綱

初年や雇ひ親にも言さるめ  
 雑子あつたは孫を子まよとさる  
 亭の葉は糸之界の髪のおち

およそ一羽筆一譲る蚕うふ  
入るふ附や河ありて夕雲花  
ふやまの漏とあてぬ金根の上  
よよ中の留花とありし子親  
うのそ水お露帯うまの脊戸  
こや竹花一羽の志りしふ  
田とうろるふあね露のまらり  
葛蒲湯や繪のうまれをえれさせ

橋板とひくそあゝ雲々南  
ぬけし花を打ちしふ斗の角  
粟の花ちるそやうく出ぬ花  
うまのそ花と向ふとありま  
あふおと挿とむくふ夜の言飲  
そそ花とあかきめあはるは  
迎ひやわ花のあはるは  
よよ水枯らん付か茶よ



細いところをまわつて舟をあきらむ  
明月を瞬し家をおくれば  
まの船をふくむ枯のやまに  
是を山にゆきまの舟にまわら山  
晴雲又詩子遊葉のゆき  
行く舟軽魚群を向うに推す  
跡に舟を放しおくに時を  
葉のまやむも母いふまをの舟

むらぬかからうと雲を舟の  
降る雲を舟をけん者の月  
浪をまわす日ある舟の舟を  
雪の中をまわす舟の舟を  
舟を舟の舟を舟の舟を  
舟を舟の舟を舟の舟を

於方壺言興行

乙叟

月不海去海義小吟ちるは

くう新河一室の炬小言よ鍋

よみ歌成筆の序は終りて

何々々々々々々々々々々々々々

書くくくくくくくくくく

難水たつ折る 象の尾を振

貫阿

叟

阿

叟

阿

ウ

石火方のあゝ新く夏の所は

何々々々々々々々々々々々々々

狂痛小貝母一味をきくお海世

不きいす杭の又折れ子多

障出ハ言いあきき愛あて

近借近一と命婦 誦る

於心ひきわきき那子世をえやう

新をゆいさうに形くつ解くさ

阿

叟

阿

叟

阿

叟

阿

叟

お代と聲もおあしく律呂之  
礎は強をいつと傳うる所  
空を想つて空と華の月の園  
ひくと心正理に響近よ  
あましくとこも瓢子あもほ  
伯父のあまのあまのあまの  
照息はくくくくくくくくく  
おまじけよ志さるるれの聲

君かられ隣心かよひてあまうる  
やうくくくくくくくくく  
沙の島谷のりま松子捨小う縁  
籃、わりて暗おまうく  
あまうるあまうる二十八お月  
不動あまうる縛くくくくく  
所側におまは腐くくく石柱  
阿守おまうくくくくくくく

投竿のふりし和まてきみの聲  
 清伽も打ちしとけ袖の丈  
 流とけ方ハ張ふ持もけ  
 奇麗よきふくて新業  
 神鏡に去るる世の白帯  
 富 采子 這るる春の伴路海老  
 阿 叟

文化昭元甲子霜降月八日  
 乙叟居士

小幡忌追福之歌仙

乙叟居士

月雲よ入てをけしおのち  
 かの袖 残わす昔よ春  
 菊いろくけり作は咲て  
 都 ちくくしほようりる  
 荷車の埃を川ぬる一時  
 波女ちとるのあけ  
 幾道 高張 方則 杜牛 其英

少  
 さしをまも成とねる葉枯露  
 全把  
 笛ふねすさふ久し〜ふりまて  
 梅芳  
 美藤子隈ふお月のそま〜山  
 東里  
 千木ハ朽ても強ぬ非風  
 連雪  
 世色きぬのがふ〜まをまひつ  
 遊身  
 さ〜ぬ平をね〜瑛瑠の掃  
 五石  
 泊屋のうりまぬ〜ぬく〜る音  
 子盟  
 の〜ま〜〜と暮の〜〜と  
 松花

花さうり面の降さ〜控〜りき  
 竹茂  
 着 露か〜けて〜ぬい出代  
 由義  
 鞋 刺波の年のねより美くあま  
 桂波  
 曆 秋貢く 朔日の空  
 閑健  
 清 色て秋をさ〜ぬ水清ふ  
 草扉  
 層 集の中 傳知〜人よりあ  
 梅風  
 い〜ま〜心河を〜も酒は〜あ  
 玉芝  
 言いまよふ出〜川 離 踏  
 言張

溪の音をいひのりしも法の意  
 よももきうまは 穉る楯の火  
 嫁と名をばふつけし種くて  
 罪しの子形の偽らふ  
 湖は各のいろをばひて  
 猿 窓よりあそびぬ紫の戸  
 柳しとて月をばふは  
 破きややくたぬ 野 綱  
 竹 茂

ナリ

尋ひよいたぬまのつをばふ  
 さ川はすけと世の表はれ  
 波やくと加ふて喜ぶ  
 掃とけく膳をばふ  
 去年のむごの供物をばふ  
 け ぬき 川 流の表  
 執筆

松

昭考哉葬事とて

秋の深 膝の何れも降 泥を

幾道

葬の望 墓あは 跪き侍りて

ま 向うけて 暮うちむ 也 菊を

全

追悼の詞書 各略之

入るも ちかき 菊の二日月

高張

と ちかき 侍あちかき 也 月を

方則

折うけて 形も 不む 也 菊を

杜牛

九

晴 燈も 志く 月や 關伽の水

其英

月とく 小種を 孫も 子も ち

全把

ちうく ちかき 膝を のりて 秋や 坊

梅芳

ゆ 欠 現 あり 魂 おも 小 ね ちう ち

雄子

正 衣 袖 ち 悲 一 芒 の 夕 阿 一

照子

む 一 の ち ち ち ち ち 秋 の や ね ち

松花

靠 する 何 一 月 の 名 け ち

五石

穂 蔭 や 偃 ち ち ち ち ち

由義

机さひ——筆をさうり傳きあふ

竹茂

所り——そそ淋き風の口着が

閑健

八月に手持あさこの夢あう車

桂波

魂ゆれせ我おろふをばり——業

子盟

八月の所をちう——あく草まらめ

草扉

月瀬て風の所を志正睡ふ所

鶴里

菩提子や桂み——人をあもつて

松濤

阿——那やふの中折秋のてふ

紫蘭

十

阿ちきふたやあ層や菊のちう——梳

梳風

秋風や柴よおく夢のはうふくも

水亭

蹄ふきく虫も手向の敷あれ也

其往

有明の志けつて空だ紅羞く明

連雪

折辭の大きくあり言りの入ぬ

遊耳

まほむきさ——て手向紅秋の字

帰嬰

気もほきていつあく業の字向は

玉芝

見——月の影をばすて輝く所

东里



身おくりたまひし長月  
はく宛つうこのまじありとや  
人の告あきしはこれ其母と  
本くの指もはちりてそら  
みよのしをさむおの南無  
や乙叟佛

こからしも人を悼免(あはれ) くれりめ 草丸

苔室

乙叟居士の忌(い)をいりおむ  
そは孝子よ親し

そ

尾水庵

菊つくりも翁を建るも追慕分 桂羅

去年のふいふ地ふ  
遊喜の節成りてあて志は  
らくはを交さしこの短と  
よもつよおむし玉くやそ  
ぬまのはしもさうふまよ

竹立庵

長月おあつてもあぬ人のうへ 旦水

のこめし言んてはくめ  
かしは感涙あつたは

三井園

うし宛しき月也あまの草のぬと 鐵齋

秋のくさく

白壁お東順

相小田系

あ軍やきぬこつつと森入けき

樵山

夕ふ二秋のきりきりやあ芒

一三

秋のてふ細き細うへも伏家う群

盤可

知恵いしきそのみもせきや津

全飯泉 尺一簣

おの森や六ツのむしをすてハ

真貫

あ川のきする中や石のき

全小田原 懐山

夕明の月いしきを借砧うふ

全石塚 喜重く

ひささしきあもあのお家あうな

露鳴

うのうも卵を落し彼家可那

五丁

丸窓の西の赤い草をみち

文中

白家やちまの紙又も那をまも

全酒白 積丈

庭掃くつらけはうりあま秋のくれ

全尺 義英

そけいしきあんふか若の草

全石塚 智羊

新霧北甲もそそ秋の聲

全 真垣

月了と心初漸よ初る星もほ

全 真況

七くらそ外豆三洋のきりし 花路ト 薙兆

わさめりカの字く全木負のまうふ 士系

相の紫を全重須あふひ為し月見ト 芙山

那をよ全ししく降りし秋のる 曳尾

月の庭全名子呼板きしやうり 和十

空あき全あし芒のま勅き全為る 壺童

仔櫛を全るハ後さ全しなく 一筆

津や 秋と全ししうう三井の陸 未古

月照や江戸うしひのふきおの娘 柳兼

多添信扶て多色信扶まきり瓜茄子 正阿

山多のく遠金谷とのししわ秋のふれ 曙山

やう下廿佐余そわあとおま全しし 牙亀

り江戸越やあ全のさうらふ山のけ 山曉

梅向全しよふのしゆ全の流土全袖 吹嶺

むし全形全を指佛全のあり全し 季曉

咲武木種木や木や木あ木し木し木母木の木聲木 麻邑

何よりか 噂してありし 萩のむ 全八王子 寛平

月のあゝ人のすのゑのまの 全羽衣 若雪

初播の語りたちけや 柴野 全川原 既 女 極里

山寺の所縁 全八王子 蒼電

野の川りらや 月の松 全川原 登 登

華 甲支村 木丸

相 全吉田 士 水

勇の鳥 全五沢 吉甫

柳 全吉村 川 至

船 全 女 里 塚

木 全大槩 竹 之

原 全谷村 魚

灯 全 庄 島

宇 全 花 殿

新 全 女 而 雲

何 全 雨 洞

有喜年一はひききくひりお松碓全 固有

月一けの下は落つく一紫く柳全 玉芝

不ろきと唐子喰れてお月細全 洗身

月影のこおびてお月 芋 畑全 亀遊

春時多末の間少月、お月より全 五遊

山の端の月一け細く 蕨の舞全上ノ系 踏石

蕨お舞月日の不ろくお月ひけ全川口 板雅

けお舞お月のお舞お月より全玉川 徳而

けくると唐子喰れてお月一け全花傍 亀居

さひ船お十りくのお月の色全猿橋上人 東里

水長くお月一けの中お舞全二代 東里

お月お舞お月お舞のぬき全四ノ市ハ 小簾

お月お舞お月お舞のお月全谷村 鳥布

お月お舞お月お舞のお月全クレナ 玉圍

お月お舞お月お舞のお月全谷村 可交

お月お舞お月お舞のお月全花サキ 茶栴

この山家の後しるしに  
梅司全十日市川

新うねむ七夕の夜  
紫夕全谷村

秋多中不のく  
連雪

人の事言さく  
遊身

秋うねむ七夕の夜  
新澤院全十天

君は山家  
喜遊全舎え

新聲也  
其往全小田

新聲也  
水亭左

新聲也  
鶴里全

青月と  
梅風全

夕暮あり  
草廬全

見よけ  
止花全古又

ふよの  
桂波全

多し  
子盟全天

萩も  
閑池全

新うねむ七夕の夜  
清吟全

引路の眠る万きれてあま子全 竹茂

厩半のあゝ鳴やあまの湖の上左 取興

おくせあやせのあまを場の這全 由義

あまをたえくれ移も秋のこれ全 聞音

浮山ふ中うしゆりきあひの月全 五石

陣きま松の帯く小松きあ左 松花

あまあま志賀の都のおより全 惠風

明月や祐あまの山全 杜牛

あま月控樹のほのあられたり全 其英

山岡や陸まわりの川の全 全把

あまの音秋のつらさをあられ全 高張

あまのうまの三の月の照全 洗粧

あまのうまの松や山越もあられ全 梅芳

於定光精舍集行

乙叟居士

道のきくお家よ明る牛の西

水をまきく明る

古簾障子の短き立替

交りよき知人し語り

知りよき新しきとぬ糸柳

啄む鳥よよ進む口の音

鐵秋

由義

子盟

松花

由義

十八

ウ

詞教かきある離の市戻り

冬うしろくきる苞の菊菊

面ほき久き世よりぬれ仏

羞恥の蕊の子むしりけり

いさふ心の何事もなく留り半

竹を嚼みよりの露の冷やし

雪ふく如月の山嶺の程ありけ

嵐よ一杯きめて雲々

藏高

松花

子盟

藏秋

由義

子盟

松花

由義



法華經の女のあやうき書	津島
あやうき	松花
川船	子盟
いせ店のあやうき	津島
さやうふせ	由義
出陣のあやうき	子盟
鹽	松花
	由義

かゝむのきれを四つ	津島
あやうき	松花
あやうき	子盟
あやうき	津島
あやうき	由義
あやうき	子盟
あやうき	松花
あやうき	由義

子盟  
 由義

清島  
 松也

及川

子盟

清島  
 松也  
 子盟  
 由義  
 子盟

中  
東  
東  
東

東  
東  
東